

非疑問形反語形式の史的考察

山口 堯 二

〔抄録〕

表層の形式が反転的に肯否の対立する判断を確認・主張する表現性の特徴として、非疑問形ながら反語形式と呼べるものに注目すると、「ばこそ」「てこそ」「にこそ」といった形式の形成が中世に集中していることが確認できる。中世という時代は、係り結び体制の崩壊によって、疑問形式の新しい体制に移る流動期であり、口語的には反語に対してその資材を十分提供できるほどの安

定した状況になかったことがその理由として考えられる。室町期の新しい反語形式である「ばや」も、その形は疑問形であるが、成立過程からいえば、非疑問形の「ばこそ」形式を前提として折衷されたと見てよいと考える。

キーワード 反語、疑問、係り結び体制、「ばこそ」、「ばや」

一 はじめに

反語という語が一般に指すものは、疑問の形式（疑問詞・疑問助詞）を借りながら、話し手があらかじめその表層の形式とは肯定否定の異なる正答案をすでに抱き、答えの返ってくることを期待するよりも、みずからその表層の仮の案を否定することによって、反転的にそ

の正答案としての判断を確認・主張するための手段となる表現法である。^①そのため、反語によって確認・主張される判断は、一般に当為性を帯びたものにもなるが、表層の形式自体は少なくとも本来その正答案を暗示するものであり、その意味で、反語は反転的で暗示的な表現法だと言える。

そこで、反語の反語たるゆえんは、疑問形式を借りることよりも、

その表層の形式が担う仮の案を否定し、反転的にそれと肯否の異なる判断を確認・主張するという表現性自体に求めることも可能であり、事実、反語と呼ぶべき表現は、疑問形式によらない表現にも存在している。よって、その両者を区別するため、便宜、疑問形式による反語を疑問形の反語、疑問形式によらない反語を非疑問形の反語と呼ぶことにしよう。

非疑問形の反語と見てよいものには、条件関係の複文全体で反語になるものと、単文ないしは複文主句のみで反語になるものがあった、さらに区別することができる。そこで、前者を複文性の反語、後者を単文性の反語と呼ぶことにしよう。その複文性の反語形式には、一般の条件形式とも連続性があり、その反語の表現性は条件表現であることと両立して認められるが、単文性の反語形式には、まさに反語形式と呼ぶしかない独自性が認められる。しかも、単文性の反語形式が登場する時期は、中世を中心としていて、時期的に偏っている。その時期的な偏りが、その形式の成立を文法史の問題として検討する必要性を示唆しているのである。

本稿は、非疑問形の反語形式を中心に、先行した複文性の形式も含めて取り上げるが、文法史の問題としては単文性の形式を中心に、疑問形の反語形式の状況と併せて検討しようとするものである。

二 「ばこそ」 と 「はこそ」

二の一 複文性の「ばこそ」

古代語の仮定表現には、次のように「未然形+ば+こそ」という形

で、その条件関係に係助詞「こそ」を介入させた例が少なくない。

(1) 玉釧まき寝る妹もあらばこそ (有者許増) 夜の長けくもうれ

しかるべき

(万葉・十一・二八六五)

・をのが身は、此国にむまれて侍らばこそ、使ひたまはめ、いと率^いおはしましがたくや侍らん、と奏す。 (竹取)

・並々の人にもあらばこそ、聞き入れでも過ぐさめ。いかにも、

かく召し寄せらるゝ面目もおろかならず、 (狭衣・二)

・世三人ノ此ル鼻ツキ有ル人ノ御バコソハ、外ニテハ鼻モ持上メ。

(今昔・二十八・二十)

たとえば、右の第一例は、「……あらば」で表示される仮定条件句を、「こそ」で卓示強調することによって、逆にその条件が成立しない場合の条件関係も強く暗示する結果、その「……あらばこそ……うれしかるべき」という表層の条件関係とは肯否の逆になる、「しかし、実際には(手枕をして共寝のできる妻は)いないから、(この夜長が)うれしいはずはない。悲しいことだ」というほどの意で、反転的に現実のありようを確認・主張する表現効果をそなえている。そのように現実のありようを反転的に確認・主張する表現効果をそなえている点においては、第二例以下も同様である。

「未然形+ば+こそ」という形式は、このようにその条件関係とは肯否の逆になる場合をおのずから強く暗示する効果を發揮するため、それを利用して、古くから現実のありようとは逆の非現実的・反実的

な条件関係に適用され、言外に現実のありようを当然そうであるはずという当為的な論理のもとに確認・主張する形式であった。その反転的な確認・主張性においては、「未然形＋ば＋こそ」形式によるこの種の仮定表現も、その条件表現全体ですでに反語と呼べる点がある。

しかし、そのように反語と呼べる点がある結果、これらの「未然形＋ば」が通常の仮定条件法とは区別すべき形式になっているかと言え、そうは言えない。仮定表現というものは、(1)の諸例のようにその条件関係に「こそ」が介入しない場合でも、その条件関係の論理的な緊密さから、反転的にそれとは肯否を逆にした条件関係を暗示しがちである。たとえば、

(2) 世の中にたえてさくらのなかりせば春のころはのどけからま
し
(古今・春上)

のような例も、「桜があるばかりに春の心はこのように慌ただしいのだ」と、桜の存在を恨めしがほどの反転的な条件関係の暗示性は十分そなえている。(1)の諸例のように現実の当為的な確認・主張性までは認められないが、このような仮定表現もその表層の非現実的な想像そのものより、むしろその言外の暗示性に託してこそ、桜に対する愛惜の情を詠んでいるとも言えよう。この(2)のような仮定表現との連続性においても、その条件関係に「こそ」を介入させた(1)の諸例の反語性は、なお一般の仮定表現の延長上にあると言いうことができる。その反語性によってその「未然形＋ば＋こそ」形式、より簡単には

「ば＋こそ」形式も、広義に反語形式と呼ぶことは可能であるが、その「ば＋こそ」形式は少なくとも反語形式としか言えないものになっているわけではない。

なお、(1)の諸例が仮定表現の条件関係から成る複文全体として反語性をもつ、複文性の反語の形式であったように、疑問形の反語表現にも、已然形による接続法で構成された複文の条件関係がその全体で反語になっている、次のような例が上代を中心に少し認められる。

(3) 足柄の箱根の嶺ろのなにこ草の花つ妻なれや
也 紐解かず寝む
(万葉・十四・三三七〇)

この「花つ妻なれや」の「なれ」は、「なれば」の意で已然形による接続法に用いられており、係助詞「や」は反語に用いられている。「あなたが触れてはいけない花妻であるのなら、紐も解かず寝ましょう」というのがその表層の意味で、「しかし、そんなわけではない以上、共寝をせずには……」という意を暗示的に主張した反語表現である。

(4) 植ゑし植ゑば秋なき時や咲かざらん 花こそ散らめ根さへ枯れ
めや
(古今・秋下)

右の例の「秋なき時や……」も、意味上「秋なき時ならば……」の意で「秋がある限り、花の咲かないはずはない」ということを確

認・主張しており、複文性の反語に相当するものである。しかし、中古には他に類例を見出しがたく、珍しい例である。

つまり、複文性の反語形式と見るべきものも、仮定表現に係助詞「こそ」の介入した(1)の諸例のみではなく、疑問形にも類例はあると言ってよい。しかし、(1)の諸例が、古代語以来、和歌散文を問わず広く存在するのに比べて、疑問形のそれは上代に偏り、また資料的には和歌に偏っているのです、非疑問形のそれとの間に成立上の影響関係は特に認めがたい。

二の二 単文性の「ばこそ」

ところが、中世になると、例(1)の複文形式から、そのうちの仮定条件句に当たる部分のみを表し、帰結句の部分の現れない、次のような表現も次第に多くなる。

(5) 指せる親の敵ならばこそ。顕れんとはよも不思議。

(日蓮消息・弘安五年)

・「自然の事候者、頼盛かまへてたすけさせ給へ」と申されければ、女院「今は世の世にてもあらばこそ」とて、たのもし気もなうぞ仰ける。
(覚一本平家・七・一門都落)

・しめぢがはらだちや。よしなき恋をすが筵、ふして見れどもをらればこそ。くるしや独り寝の、わがたまくらの肩かへて、もてどももたれず。そも恋は何の重荷ぞ。
(閑吟集・七〇)
・一夜ひとよふたよ二夜とも言はばこそな よしせめて朝顔の花の露の間まなり
(宗安小歌集・一六六)

・横笛是を見給ひて、「情なの有様や。昔にかはらで、今も契らんといはゞこそ。かはりし姿たゞ一目見せさせ給へ」と
(伽・横笛草紙)

このように帰結句に当たる部分を伴わない例も、そのような例の少ないうちは、あるべき帰結句の省略と解することができたはずである。しかし、中世以降は、逆に帰結句を伴う例のほうが実際には稀になっている。そうなると、帰結句の省略はむしろ語源の問題に過ぎなくなり、もはや本来の仮定条件句ではなく、それを出自として表層の事態を否定する現実の状況を、反転的に確認・主張すること自体を狙いとする、単文性の形式になってきたと見てよいことになる。そのようにして仮定条件句から変容したものは、疑問形式にこそよらないが、通常の疑問形のそれに類する単文性の反語形式と言えることになる。ここでは、「未然形+ば」の形も具体的な帰結句を要求する本来の仮定条件句としての働きは消失し、いわばその働きの一部として、可能的な事態のありようを表示するにとどまり、その分、「こそ」が反語形式としての反転的な暗示力を代表するようになったと見てよいのではないだろうか。

その単文化したものの文末形式は、「未然形+ば」の形が、それ本来の働きを失っただけ「こそ」と一体化して反語形式を構成することになったと見てよいから、その承接する活用形まで示すにしても、先述の複文性の反語形式に対しては、「ばこそ」を一つにまとめて「未然形+ばこそ」と表記してよいことになろう。ここでは、それを「ば

こそ」形式と呼ぶことにする。単文性の「ばこそ」形式は、まさに反語形式と呼ぶしかない独自性をもつものになったのである。

なお、先述の複文性の「ばこそ」形式における帰結句の省略から、反語の「ばこそ」形式が形成されるまでの変容は、一挙に生じたものではなく、漸進的であつただろう。したがって、事実上「ばこそ」で文が終わつても、帰結句の省略と解せるうちは、複文性の「ばこそ」形式と見うるから、具体的な個々の表現については、複文性の「ばこそ」形式と単文性の「ばこそ」形式とが常に区別できるとは限らない。しかし、時代的な用例の分布から一応の線を引くことは可能であり、(5)の諸例のような中世の例は、単文性の「ばこそ」形式と見うる可能性が高い。

南北朝以降には、たとえば次のように「ばこそ」形式の単文中の主語が「は」で提示された、「……は……あらばこそ」などの形も見受けられるようになっていた。そのような形は「……は……なり」という典型的な判断形式のより強調的な言い方と認められるから、そのような形の出現は、単文性の「ばこそ」形式が定着してきた目印にもなるだろう。

(6) 此殿ばら兄弟は、身こそ貧なりとも、心は貧にあらばこそ。楚忽に入て、細首うちおとされ、あしかりなと思ひ、

(曾我・六)

・もとより勸進帳はあらばこそ。笈の中より往来の巻き物取り出だし、勸進帳と名付けつつ、高らかにこそ読み上げけれ。

(謡・安宅)

「ばこそ」形式による反語表現の例は、近世に入つても次のように引き続きよく認められる。

(7) 大鼓もちでも犬でも猫でもあらばこそ、人でござんす物を。苦
しうないことでも有。
(仮・難波鉦・三)

・又身共も奉公にこれ程も油断せず、商物ももじひらなちがへ
たことのあらばこそ。
(浄・曾根崎心中・上)

・針のむしろの此家に、生きづさえもたえばこそ。

(東海道四谷怪談・二幕目)

三 「てこそ」「こそ」

「ばこそ」形式が成立すると、「こそ」が反語形式としての反転的な暗示力を代表する、その特徴を利用して、さらに「活用語連用形十てこそ」「活用語連体形十こそ」という形の反語形式もそれぞれ形成された。次にそれらの反語形式について述べよう。

「活用語連用形十てこそ」形式は、「てこそ」形式と呼ぶことにする。この形式は室町時代の口語的な言い方から認められるようになっていく。次にその一斑を示す。

(8) 欲振頼綱、トガニ類レタル綱紀ヲ振起セウトテモ、云誰克補ハ
ントテ、人ガアツテコソナリ (史記抄・秦始皇本紀・四七ウ)

・アレガ義ト徳トハ我レガ勢ト財トニハカエウト云テモナルマイ。
ナニガ易ウ者デハアツテコソ(蒙求抄・五33ウ)

・ナンニ小庭ナドヲサウヂシテ、用ガアツテコソト云タゾ

(玉塵抄・三・三四八頁)

・師資相続ニマシテ日出度、事ハ別ニ在ツテコソ(巨海代抄・上)

・なにと言ふぞ。殿より御ざつしやうが参りたるか。あまりふる

ひて言ふゆへ、きこえてこそ。(室町物語・窓の教)

この「てこそ」形式については、『ロドリゲス日本大文典』⁴⁾に次のような指摘がある。

第四。主として、「て」に終る分詞の後へ添へた場合であるが、或言ひ方に於いては否定の意味を持ち、決してない、話すことなどありはしない、有るものか等といふ意を表す。例へば、「なつてこそ」「又は、「なつてこそあれ」「御座つてこそ」「参つてこそ」「書かれてこそ」「参られてこそ」「食べられてこそ」「御前に物を申されてこそ」「してこそ」「知つてこそ」

(ロドリゲス日本大文典・二)

「ばこそ」形式(未然形+ばこそ)においては、その「未然形+ば」の形も具体的な帰結句を要求する本来の仮定条件句としての働きは消失して、たんに可能的な事態のありようを表示するにとどまり、それに伴つて、「こそ」が反語形式としての反転的な暗示力を代表す

るようになったと見たが、「てこそ」形式は、その接続助詞「ば」と助詞の下位分類においても共通性のある接続助詞「て」に、「ばこそ」の「こそ」を付けた形である。その出現する時期から見ても、「てこそ」形式は「ばこそ」形式の特徴を利用して形成されたと考えてよからう。「てこそ」形式は、「ばこそ」形式においてたんに可能的な事態のありようを表示するに過ぎなくなった「未然形+ば」を、「連用形+て」に置き換えることによって形成されたのである。接続助詞「て」は、本来接続助詞「ば」よりもはるかにおおまかな意味関係しか表示せず、その消極的な関係表示のためにかえつて多様な意味関係に適應することもできたが、そのような関係表示の消極性が、「ばこそ」形式の構成を利用して新たな反語形式を形成するにも、かえつて好都合だったと考えられる。

「てこそ」形式には、「ばこそ」形式の形成を容易にした複文性の「ば+こそ」形式のような先行形式はなかったが、「てこそ」形式にとっては、「ばこそ」形式という単文性の反語形式自体がモデルとしてその成立を助ける先行形式になったのである。「てこそ」形式の成立によって、活用語の連用形を承けての反語表現も可能になった。

「てこそ」形式は、近世にもその早い時期には、次のように用いられている。しかし、今のところ、近世中期以降にはその例が見当たらない。

(9) いささかおもしろげもあつてこそ。

(噺・昨日は今日の物語・上)

・上様まけさせられて、又々召出、いつものごとくニ成申候。名譽なる主従之間にて御ざ候。但馬被申候様、おれハ何共思ふてこそ、あなたニさう思召さば、あなた次第よ。

(沢庵書簡・寛永一五・七・二・小出吉英宛)

・「いやくあの羽つがひではあつてこそ。某が描いた様には得飛ぶまい」と言ふた。
(仮・浮世物語・三・一一)

「活用語連体形+にこそ」形式は、「にこそ」形式と呼ぶことにする。この形式も室町時代の口語的な言い方から認められるようになっていく。次はその一例である。

(10) ゲニモワメイテカナシガルトモ沈ムベキ舟ガ不沈ニコソゾ有程

ニ吟嘯自若ナルゾ

(四河入海・二・三15ウ)

・人ニ恥ヲ忍ンデ米ヲ請ハンヨリハ首陽ニワラビガナカラウニコソ
(中華若木詩抄・中)

この「にこそ」形式の「に」は活用語の連体形を承けている。「ばこそ」「てこそ」との関連から見ても、この「に」は接続助詞「に」であろう。「にこそ」形式も、「ばこそ」形式の中の「未然形+ば」、あるいは、「てこそ」形式の中の「連用形+て」を「連体形+に」に置き換えることによって成立したと見てよい。接続助詞「に」の關係表示は、後の「のに」の成立へと、次第に逆接への偏りの進む時期ではあるが、古来多様な意味關係に適用できるものであった。しかし、

「にこそ」形式には、その連体形に承接する点が、後述する疑問形の反語形式のめざすありようと共通しており、その点がその關係表示性以上に、利点として歓迎されたのかもしれない。

「にこそ」形式の例も、次に示すように近世の中期ごろまではまだ用いられている。近松門左衛門の浄瑠璃には概して例がめだつ。

(11) 和中散でもきくにこそ。

(浄・丹波与作待夜の小室節・中)

・ア、去り逆はお気の弱い。何の神仏様がないにこそ。

(浄・伊賀越道中双六・九)

四 非疑問形単文性反語形式の成立理由

以上のように、非疑問形単文性の反語形式「ばこそ」は、中世に形成され、その特徴を利用して室町期の口語では「てこそ」「にこそ」形式も形成されたと見うる。そして遅くとも近世後期にはそれらが姿を消していく。その時期的な分布は中世を中心とする時代に偏っているのである。中世を中心に、なぜそのような反語形式が必要になったのであろうか。次にその問題を反語形式がその基礎的な地盤としたはずの疑問形式のその時期におけるありようから考えてみよう。

中世という時代は、古代語の係り結び体制が崩壊して新しい構文体制がそれに取って代わる過渡期であった。通常の反語にその基礎地盤を提供していた疑問形式は、古代語では係り結び体制の重要な一翼を担った形式である。その体制が崩壊する中世は、したがって、反語の形式にとっても、その基礎地盤がいわば地滑りを起こした時代である。

疑問形の反語形式も、それまで通り疑問形式に基礎地盤を求めると、変化する疑問形式の跡を追って変わらざるを得ないが、中世から近世にかけては、通史的に見てその跡を追うべき疑問形式自体が、まだその落ち着くべきところに落ち着いていない流動期であった。

少し具体的に言えば、古代語の疑問表現では疑念の焦点になる成分を卓示強調すべく、疑問の係助詞「か」「や」が係り用法としてその成分の下に介入しがちであったが、中世に入るところから、疑問表現においても、疑念の焦点を強調するよりは、解答案になる事柄全体を一つに取りまとめて、主要な成分の論理関係を明示化する要求のほうが高まり、その事柄を一つにまとめた上で、疑問助詞は文末に付けるという方向に向かった。ただし、そのように大きな変化は急激には達成されない。そのため、中世には機能における新旧のありようの連立的な形式がいろいろ出現することにもなったのである。⁽⁶⁾

疑問詞による不定方式の疑問表現でも、古くは疑問詞が係り用法の「か」と共起する「何か」「何かは」「何人にか」などの形で反語形式になることが、どちらかと言えば多かったが、中世には疑問詞も次第に文中に「か」を伴うことなく反語を表示するようになった。そのため、もともと係助詞「か」の係り用法とは共起しなかった主格の表示を担う格助詞も、室町期の口語では次のように「何が」などの形で反語形式にも用いられることがめだつて多くなった。⁽⁷⁾

(12) いや／＼おいそがはしひに、はたらきこそいたさず共、何がさやうにゆるりといられませうぞ、たゞ罷帰ふ

(虎明本狂言・鱧庖丁)

中世の不定方式の反語表現は、次にその一例を示すように反語の助詞「やは」を疑問詞相当の副詞に転用した「やは」「やはか」「やはや」などによることも多くなった。⁽⁸⁾

(13) やはか女の身として、大法座へは上がるべき。

(幸若・常葉問答)

このような反語の助詞の副詞化とその進出現象も、やはり反語形式の基礎地盤となるべき疑問形式の変動によって、疑問詞と係り用法の「か」の共起する従来の不定方式の反語形式が時流に合わなくなってきた、その補いにほかならなかったであろう。

しかし、不定方式の反語形式のこのような変化は、いずれもいわば疑問形式の内部においてまかなわれたものであるが、特定の解答案によって成り立つ特定方式ではそうはいかなかった。特定方式の疑問表現では、古来その特定方式の疑問表示を中心的に担ってきた係助詞の「や」にも、事柄を準体的にひとまとめにした句を「にやあらん」で承けるという形で、いわば「指定辞＋推量辞」という助動詞層に適用されることが盛んになり、その慣用の結果としての簡略化から、鎌倉期にはまず「やらん」という新しい疑問の終助詞が形成されて、時代の要求に応えた。⁽⁹⁾

(14) 御酒ハ参リ候ヤラムト問ヘバ

(梵舜本沙石集・七)

しかし、その「やらん」を疑問表示に用いた時期も、鎌倉期をその盛期として、比較的短期間に終わり、その語形も「やら」へと転じながら、それは不定の意を添えるだけの副助詞に変化していく。一方、疑問形式のほうは次のように文末に「か」を付ける形式へと推移し、もとの係助詞「か」は、口語的に疑問を表すにはもっぱら文末に用いられて、終助詞へと変化していったのである。

(15) 朝ニ顧ルトハ今夜ハスルト御寝ナツタカト相尋ルヲ云

(応永二十七年本論語抄・為政)

このように疑問の助詞は形態的にも位置的にも変化していく不安定な状況にあった。そのような状況で、その形式を反語に利用することは、すぐには不可能だったのであろう。「やらん」は反語形式として用いられなかった。文末の「か」は反語形式として用いられることはあるが、たとえば次のように、その当為的な表現力を「べし」に依存しなければ、落ち着かなかったようである。文末の「か」の表現性だけではなお不十分だったのでないだろうか。

(16) 父のためにそなへておきたる命、おもはざることに、はつべきかと思ひ、自害をのがれけるこそ、無慙なれ。(曾我・四)

以上のように、疑問形の反語形式は、その基礎地盤となる疑問形式の大きな変動に依じて、新しい形式を必要としていたが、特定方式の疑問形式の側には、その要求を充足させるほどにいわば品質の安定した資材がまだ乏しく、時代の変化に依じて新しい形式を供給するには、慣例にとらわれない工夫が必要になっていったと考えられる。

五 疑問形の「ばや」の成立過程

中世における疑問形反語形式にも、その一端にはすでに触れたが、なおその反語形式にも非疑問形のそれとの関連において注意すべきものがある。次のような「未然形+ばや」がそれである。

(17) なにとてかたて湯のからくなかるらん／むめ水とてもすくもあらばや
(竹馬狂吟集・五)

・イカニコロサウトスレドモ、トガバアラバヤチヤホドニエコロサヌゾ
(史記抄・五帝本紀・二36オ)

・或説ニハ此水ヲトツテイテモ子由ナンドガヲラバヤゾ、サル程ニトツテイテモ何ノ用ゾ
(四河入海・一・一48オ)

・酒ハノマセタシ、銭ハアラバヤ、詩デ酒ニカヘテ淵明ニ酒ヲメタトノマセタ也。
(中華若木詩抄)

このように活用語の未然形に付いて反語の意を表す「ばや」については、湯沢幸吉郎が「(一) 希望の意を表す。…… (二) 打消の意を表す。……」⁽¹⁰⁾と、希望の意の終助詞「ばや」と一括して取り上げて以

来、希望(願望)の意の終助詞と、連続するもののように見られがちであり、また、その意味についても、反語とは言わず、打消、ないし、否定という説明法が一般に通用してきたようである。小林好日も、願望の「ばや」への言及に続いて、「室町時代に、次の如く否定にかはると共に、亡びた」と、その両者の連続性を認める言い方をしている^①。

このような理解の方向に対して、筆者はかつて『古語大辞典』(小学館)の「ばや〔終助〕」の項を担当した折、①話し手の願望を表す。……②話し手の意志を表す。……③反語的に、打消の意味を表す。室町時代の口語で多く用いられた。……」などの語義解説・用例に加えて、最後に設けられた語誌欄に、次のように触れたことがある。

③は室町時代の口語的表現にみられるものであるが、これは同じく強い打消を表す「ばこそ」への類推によって成立した用法であろう。①からの自然な意味変化の結果とは考えにくい。

ここに言う「ばこそ」は、本稿に言う非疑問形単文性の反語形式のそれである。その③の「ばや」は疑問の係助詞「や」によると見てよいから、①②の「ばや」の「や」と語源的なつながりがないとは勿論言えない。しかし、この希望(願望)の「ばや」は遅くとも平安時代に成立していた終助詞である。それに、古代語では「か」を含めて、疑問の係助詞から希望(願望)の形式への変化は、珍しくなかった^②。意味の変化が実現するには普通一定の方向性が認められるものである。もしも、その「ばや」が反語に転用されたのだとすれば、その

転用の成立する室町期まで、終助詞「ばや」はなお「ば十や」と容易に分析できる二語性を維持しており、しかも室町時代に至って、終助詞「ばや」が成立した方向とは逆向きに、再び語源上の疑問性を蘇らせたという、無理な想定をしなければならぬ。反語の「ばや」の成立は、希望の意の終助詞「ばや」からではなく、別途に「ば十や」として考えなければならぬのである。

疑問形単文性の「ばや」形式にも、もしも非疑問形の「ばこそ」形式の成立と同様の過程、すなわち、複文性の反語形式(「ば十や」形式と呼べるもの)が先行し、かつ、多用されていたという事情でもあれば、「ばこそ」形式の影響という考えは否定しなければならぬ。しかし、疑問形の複文性反語形式のありようについては、すでに複文性の「ば十こそ」形式の箇所で言及した通りである。中古にはその形式の例さえ認めがたいほどであった。鎌倉期には次のように複文性の「ば十や」形式の類例と言えそうなものも皆無ではないが、これは仮定の条件関係に「やは」を介入させており、鎌倉期にも今のところ珍しい例である。

⑭ ヤガテ流罪ニヲヨバント、コノ人ノ申ヲコナイケレドモ、ソ
レヲバ、ツヨク御気色エアラジトヲボシメシタリケレバ、云ツ
グベキ罪過ノアラバヤハ、サシモ申ベキナレバ、サテヤミニケ
リ。
(愚管抄・六)

したがって、右のような例から複文性の「ば十や」形式の存在も仮

に少しはありうるとしても、そのように影の薄い存在から直ちに「ばや」形式が導かれたと見るべきではなからう。

では、単文性の「ばや」形式はどのような過程を経て、そのように室町期においてにわかに成立し得たのか。筆者のかつての簡単な言及は、本稿の立場から改めて次のように言い直してよからう。室町期の単文性の反語形式「ばや」は、その「や」が疑問の助詞であるから疑問形の反語形式ではあるが、それにもかかわらず、その形式の成立過程には、同じ単文性の「ばこそ」形式という非疑問形の形式の影響を考へるべきである。非疑問形の単文性の「ばこそ」形式は、複文性の「ばこそ」形式を踏まえて成立した。その「ばこそ」形式については、「ばこそ」形式との違いを明示するためにこそ、中世における「ばこそ」の一語化にも言及したが、「ばこそ」から「ばこそ」への変化は前述の通りきわめて漸進的であった。その意味でも、「ばこそ」への一語化は、「ばこそ」への遡源を直ちに困難にするようなものではなかった。

したがって、前掲の例(18)から察せられる「ばや」形式の例が仮に少しはありうるとしても、それは、すでに述べた非疑問形反語形式の疑問形に対する影響、ないしは、援助が、「ばや」形式の成立よりも一足早い段階においてもあり得たと言えよだけである。

中世の反語形式については、疑問形式の側の旧秩序の崩壊に伴う安定した資料の不足から、従来の慣例にとらわれない工夫によって非疑問形の反語形式に依存することが多くなったが、その一方では、「ばや」形式の成立過程に認められるように、疑問形式をこそ反語形式の

本拠として、できればそれに拠ろうとする意識も働いていたことをうかがわせる。例(18)もそのような意識のもとに、非疑問形の形式において反語としての反転的な暗示力を代表する「こそ」のみを旧来の体制に基づく「やは」に置き換えた表現と見うる。

六 む す び

表層の形式が反転的にそれと肯否の対立する判断を暗示的に確認・主張するという表現性を反語形式の目印にすれば、反語形式には疑問形式によらない非疑問形のものも認められるが、疑問形・非疑問形どちらにも、条件関係の複文全体による複文性の反語と、単文ないしは複文主句のみで反語になる、単文性の反語があった。非疑問形の場合も、複文性の「ばこそ」形式は、一般の条件形式と両立するが、「ばこそ」形式以下の単文性の形式には、まさに反語形式と呼ぶしかない独自性が認められた。

単文性の反語形式の登場は、中世を中心としていた。複文性の「ばこそ」形式の慣用を踏まえて、鎌倉期にまず「ばこそ」形式が成立したが、その形式の特徴を利用して、室町期には承接する活用形を異にした、「てこそ」「にこそ」形式もそれぞれ成立したのである。

係り結び体制の崩壊する中世は、通常の反語が本拠とする疑問形式が、地滑りを起こしたに等しく、通史的に見れば、まだその落ち着くべきところに落ち着いていない流動期であった。疑問詞を何よりの標識とする不定方式の表現においても、反語形式には係助詞「か」の係り用法は衰退し、室町期には主格助詞を伴う「何が」や、反語の助詞

を疑問詞相当の副詞に転用した「やはか」「やはや」などの多用がめだつが、それらは疑問形式の内部でまかなえたものである。しかし、疑問助詞を何よりの標識とすべき特定方式の表現においては、そうはいかなかった。特定方式の疑問助詞には新たに終助詞「やらん」が成立したが、反語形式に利用できるには至らず、次いで文末で疑問表示に当たる「か」の終助詞化が進んだが、これも中世には反語に十分な資料を提供するまでには至らず、口語的な反語形式には、従来の慣例にとらわれない工夫が必要になっていたのである。「ばこそ」形式をはじめとする非疑問形単文反語形式が、疑問形の特定方式に相当する形式として中世に登場した最大の理由は、その点に求められる。

室町期の新しい反語形式には、疑問形に属する「ばや」形式も成立したが、それは非疑問形が幅をきかせた状況の中でも、できれば疑問形式に抛ろうする意識のもとに、非疑問形の形式で反語としての反転的暗示力を代表する「こそ」のみを疑問形式に置き換えるという折衷法に依ったと言えるものであった。

注

- (1) この反語をはじめ、その基礎となる疑問表現についての考え方、および、用語は、拙著『日本語疑問表現通史』(平成二年、明治書院)による。
- (2) 拙著『古代接続法の研究』(昭和五五年、明治書院)第一章・二の二、拙著『日本語疑問表現通史』第三章三。
- (3) 『室町物語集・下』(新日本古典文学大系)では、「きこえてこそ」と、「て」を打消の意を含む接続助詞「で」と見ているが、誤解だと

思う。

- (4) 土井忠生訳、昭和三〇年、三省堂。
- (5) 拙著『古代接続法の研究』第十章、拙著『日本語接続法史論』(平成八年、和泉書院)第二章三の一。
- (6) 拙稿「係り結び体制末期の新旧連立形式——機能の新旧連立性——」(『京都語文』創刊号)。
- (7) 拙稿「反語副詞「なにが」の形成」(『佛教学文学部論集』八二)。
- (8) 拙著『日本語疑問表現通史』第六章二の三。
- (9) 拙稿「疑問助詞「やらん」の成立」(『語文』五三・五四輯)。
- (10) 湯沢幸吉郎『室町時代言語の研究』(昭和四、大岡山書店、昭和四五、風間書房再販)。
- (11) 小林好日『日本文法史』(昭和四五、刀江書院)。福島邦道「否定の「ばや」再考」(『実践国文学』十五)も、希望の意の「ばや」との連続性を想定する方向のもの。なお、山内洋一郎「否定の助詞「ばや」について」(『連歌とその周辺』、昭和四二年)は、疑問形の仮定表現との関連を想定。森脇茂秀「否定の助辞「ばや」をめぐって」(『一の坂川姫山国語国文論集』、平成九年、笠間書院)は、逆接の「ばとて」との関連を想定する。しかし、その見方には従えない。
- (12) 拙著『日本語疑問表現通史』第三章一。

(やまぐち ぎょうじ 国文学科)

一九九八年一〇月一四日受理